



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2020年2月8日発行 第52号
事務局長 水原 渉
TEL/FAX 0749-47-5169 (共通)
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

【シリーズ:JSAとわたしー第3回】

「福井の地から……」



個人会員分会

吉田一郎

福井に戻って6年間で過ぎました。その中で新たに気づいたことがいろいろ

ありました。

一つは例の関電と原発立地自治体との醜い癒着の問題です。関電は高浜町元助役に脅された被害者のように振る舞っていますが、世間を欺く態度だといわざるを得ません。元助役はことあるごとに「差別者」という脅し文句を常套手段として恫喝・脅迫し、意に沿わない人を排除したり屈服させてきた人物です。地域を牛耳るボスとしてこの50年近くにわたって高浜町を支配してきたことは関電も知る事実です。

このような問題のある人物を関電は長年にわたって「先生」と呼んで持ち上げてきたばかりか、この元助役が顧問や役員として関わるいくつかの会社に原発関連の仕事を発注し続けたのです。関電は原発の建設・稼働という動機のもとで地域ボスを通じて地域買収をしていたのです。元助役は関電の動機をよく承知したうえで、弱みにつけこんで利権をむさぼったのです。両者の間で回されたお金の原資は利用者が支払う電気料金です。関電発のマネー還流事件といわれるゆえんです。関電と元助役は被害者と加害者という関係ではありません。片や原発稼働のために片や己の利権と地域支配のために、互いに手を結んで相手を利用し合った共犯者同士です。詳しくは触れる余裕はありませんがこの点では県も責任を免れません。福井県はこの元助役を人権問題の専門家と公認して、県の「客員人権研究員」として1971～2018年という長きにわたって厚遇してきたのです。

もう一つ私自身が直接携わったことを紹介します。皆さんは「越石(こしこく)」という言葉をご存知で

しょうか。越石とは他村の地籍の田んぼを耕作する場合賦課金を支払うという慣行的制度で今日でも残っています。

ところがそこに差別が潜んでいたのです。5年前に私の知り合いが払わなくてもよい越石賦課金を延々と50余年間払わされていることが判明したのです。詳細は省きますが、それは不当な差別であると私は問題提起をして不当な賦課金を撤回させました。

人権と民主主義という見地からみると、道理の通らない理不尽な地域支配権力が地域に横行する状況に憤懣やるかたない思いをしていますが、病気の身でもあり怒りもほどほどにと自分に言い聞かせながら日々過ごしています。もちろん気の滅入ることばかりでなく、希望と勇気の出る話もありますが紙数も尽きましたのでこの辺で終わりにします。

【活動報告】滋賀大学サステナウィークの挑戦

滋賀大学分会 中野桂

(滋賀大学サステナウィーク実行委員会委員長)

滋賀大学では、2019年11月25日から29日までの一週間を「滋賀大学サステナウィーク2019」として、サステナビリティに関する講演会やワークショップ、展示などを行なった。



企画は、経済学部地域連携教育推進室のスタッフ(教員2名、事務補佐員1名)を中心として、6名程度の学生有志からなる実行委員会によって立案した。

実は、こうしたイベントは、Sustainability Weekとして、以前より世界各国で開催されている。日本では北海道大学がサステナビリティ・ウィークとして2007年から2017年まで毎年開催してきた(2018年以

降は開催されていない。なお、サステナビリティ・ウィークおよび sustainability weeks は2013年に北海道大学の商標登録)。他にも立命館大学でも学生主体の実行委員会形式で2017年より Sustainable Week を開催している。

滋賀大学としては初めての開催ではあったが、これまでの地域連携教育推進室(および前身の就業力育成支援室)のこれまでの活動やネットワークが縦横に発揮され、少ないスタッフながら多彩なイベントを開催することができた。

学生企画としては、立命館大学 Sustainable Week 実行委員会のメンバーを招いた「SDGs 表現論」、駐日タンザニア臨時大使を招いた講演会、日本教育創造機構の代表を招いた講演会などのほか、脱プラスチックに向けた展示などがあった。これらの多くは普段から地域連携教育推進室に出入りする学生によるものであった。

一方、自然エネルギーによる地域再生を取り扱った映画「おだやかな革命」の上映会は、地域で自主上映会を企画していた市民有志の方々との共催となった。また、ネパールの女性たちによるキルトの展示会は、「国際交流の会とよなか」の協力によるものであった。また、バースセンター(助産施設)の設立を目指す助産師グループの方々もワークショップを開催してくれた。これらは、地域連携推進室のメンバーが日頃から築いてきた地域との関係から生まれてきたものである。

実行委員会メンバー教員による企画としては、JICA 関西滋賀県国際協力推進委員、城南信用金庫顧問、羽衣国際大学教授をお招きした講演会のほか、大学における SDGs 関連の取り組みを紹介したポスター展や大きなテントの中に薪ストーブを設置した「バイオマステント」などもあった。このテントは、その中で認知症に関するワークショップが開催されたり、夕方になるとフィンランド式のスチームサウナになったりして活用された。

昨今、SDGs という言葉が飛び交っているが、SDGs の概念は目新しいものではない。とかく「国連が推進する」という枕詞もつくが、実は長きにわたって、国

連自身が様々な分野の NGO などから求められて、ようやく SDGs という形になったに過ぎない。言い換えると SDGs はトップダウンではなく、ボトムアップから生まれたものであり、そこに SDGs の本質がある。

多文化共生のイベントを開催しようとしたときに、大学関係者の中でも「SDGs と関係するのか」という疑問を呈した人がいたが、実は、SDGs は環境に関するものだと思っている人がいるなど、言葉の流布とは裏腹にその本質を理解する人は少ない。「SDGs のどれに当てはまるのか」という質問もよく受けるが、それは自らの発想を縛るものである。17 の目標で足りなければ、私たちが付け加えていけばよい。SDGs の G はゴールの G であるが、決してそれはゴールではない。おそらく2020年度もサステナウィークを開催することになるが、次回も自由な発想で伸びやかな企画を展開していきたいと考えている。

【シンポジウムのお知らせ】

1) 2019 年度日本科学者会議近畿地区シンポジウム

「大学自治の危機と、その克服に向けて」

主催：日本科学者会議近畿地区会議

日時：2020年3月29日(日) 10:00~12:00

会場：京都大学法経第7教室(左京区吉田本町)

講演：「学問の統制・動員と大学自治の現状」

講師：中嶋哲彦氏(名古屋大学)

「軍学共同の現状と、反対運動に関わって見えてきた課題」

講師：多羅尾光徳氏(東京農工大学)

総合討論(11:20~12:00)



2) シンポジウム

「これからの大学入試のあり方を考える」

主催：シンポジウム実行委員会

(大学入試改革おかしいんちゃう親の会、京都教職員組合、日本科学者会議京都支部など)

日時：2020年3月29日(日) 13:00~16:00

会場：京都大学法経第7教室

基調講演：羽藤由美氏(京都工芸繊維大学教授、
応用言語学)

パネリスト：高校生、高校生の保護者、高校教師、大学教員